



道あれど

梁雅子



三一書房

梁
やな

雅 子
まさ と

大阪に生る

稲垣足穂に師事す

『悲田院』（1959年3月・三一書房刊）執筆

第11回日本女流文学者会賞（昭和35年度）受賞

現住所 大阪市住吉区万代西二丁目40

一九六〇年五月二十六日第一版発行

道 あ れ ど 価 三二〇円

著 者 © 梁 雅 子

一九六〇年

発 行 者 田 畑 弘

発行所 株式会社 三一書房

京都市左京区北白川西平井町二四

電話 ⑦三一〇一・三八八五番

振替 京 都 六 四 〇 三 番

東京都千代田区飯田町二ノ一四

電話 (331) 九三九三・五六五七番

振替 東京 八 四 一 六 〇 番

印刷 明文舎印刷株式会社
製本 新生製本株式会社

乱丁・落丁はおとりかえいたします

道

あ

れ

ど

一章

丘の上の木蔭は明るい。五月半ばの陽光は木の葉の真緑の紗で透されて、邦代の閉じている臉の裏に原色のさまざまな模様を描く。邦代は頑固に眼を閉じて、赤や黄や緑の玉が飛び散ったり寄り合ったりして忙しく動くのを顔中で感じていた。風が吹く毎に傍に寝そべっているチエコの汚れた髪の毛がする。チエコは眼を開いているのだろうか、と邦代は思った。な、あんた、どない思う——。ええ、何を——。と云ったきり二人は三十分程ものも云わずにいたのである。チエコの呼吸で、彼女も仰向いている様子である。くたびれた黒服の中のはち切れそうな白い豊かな肢態と竝んで、五尺四寸の自分のクリーム色のポロシャツに紺のズボンのたくましい女体とを邦代は描く。それは地上から浮き上って天でもない空間に漂っていた。邦代はふとその宙ぶらりんに涙ぐましくなる。つい眼前にある寮は森閑としていた。先刻、おばはん達の笑い声がガアガアとひびいて直ぐ消えてしまったただだ。

「あーあ、醒さ……こら、もう眼あき」

チエコの手が邦代の乳房を邪慳に握った。二人は笑い合って両足を投出した形で起上った。

「なまぐさいな、草の匂か土の匂かしらんけど……まるで青い月経みたいや」

チエユは荒っぽく邦代にもたれかかり、片手を首筋にかけてぐっと引く。二人の笑顔が頬をすり寄せて竝んだが眼は笑っていなかった。「ほんまにもう……」と癩癩を立てて友の肩をゆすぶるチエユの手をほどいて邦代は、「うるさい、黙って……」と睨んで長い素足の膝、ぼいに巻きつけてあるタオルをほどいた。汚れたタオルには刷毛で刷いたような血痕が点々とあり、膝小僧にはすりむいた怪我の後の血が黒くなって固っていた。

「ああ、先刻のお使いで転んだゆうてたのそれ……」

邦代は答えずにニヤニヤ笑いながら喋っているチエユの鼻先でゆっくりとタオルを振って見せる。

「自転車でころんだんやろ」

邦代はうなずいたが矢庭にそれをチエユの顔に猿ぐつわのように巻きつけて仰向けに転してのぞきこんだ。阿呆、阿呆と、手足をバタバタさせるチエユの眼が一瞬キラリと光り、暴れていた手足を忘れて深く息を吸い込む。次の瞬間彼女は慌ててタオルをひきむしり草の上に投げつけた。

「意地悪、いやらしい奴」

チエユの罵声をゲラゲラ笑いで受けている邦代の視線の中で白い首筋から羞らしい血をのぼらせてチエユは不機嫌に五本の指を額髪につっこんでうつむいた。

「なあ、チエユ、なまぐさいな……何もかもこれはうち（私）とあんただけの秘密やで、なんでも云い合おう」

黙ってうなずくチエユに邦代は先刻丘に登る道で自転車を倒して転んだ時、これでも巻けと山荘の道を切り崩していた人夫が抛ってくれたのだと話した。

「若いやろ」

「その通り」

「三十までの汗の匂いや」

「御名答」

二人は顔を見合し、吻と熱い息を吐いた。チエユは草の上に投げつけた汚れた布に手を延して、よいか、と云うように邦代を見、掴んだタオルを恐る恐る鼻先に持ってゆく。顔をしかめて一息嗅いだ。が反射的に離してじっと嘖め、今度はゆっくり眼を閉じて再び嗅いだ。汗と油に饅えたそれは、徐々に吸いこまねば溶けてゆかぬ毒の匂だ。チエユは油で光った頑丈な裸の上半身を、胸毛を、熱い体温を思う。それに抱かれる自身の柔かさを感じる。先刻からこの丘の静寂を破って間断的に鋌でも打ちこむように響いては消えた遠くの方の音が今はっきり二人の心の中に打ちこまれる。砂利と金属との噛み合う、カツカツと云う音である。

「あれか……」と音のする方にチエユは顔を向けた。そこにはいかにも歩いてゆけるもののように木々の青葉の盛上りが幾重にもつらなっている。

「な、行こう……」

チエユのぎらつく眼や乾いた唇が誘うのに邦代は黙って首を振った。

「小遣いもないし、うちが働く、な、山分けしよう」

「いかん」

「そんなら、なんでこんなもん嗅がすのん」

「ちつとは身体のだしになるやろおもて……」

「なんやて……」

武者振りつくチエユをそらしながら邦代はその手からタオルをとると元通り足に巻きつけて柔かい肩を抱いた。疼くものは共通である、この生きた匂に……。と邦代は財産でもあるかのように膝のタオルに触ると吻として云った。

「ペイ（麻薬）と同じやで……暫く辛抱しよう、な、あのおばはん達みたいにならんように——それに野上先生の期待に背いたらいかんやろ……」

「そやけど、こないして、一体どないなるねんな……」

「さあ、そらうちも判らんけど」

「男と寝るのがそない悪いことか……」

邦代にもそれにはつきり答えられる訳がない。現にあの古女郎達は疲れ果て、貧乏し尽し、世の中に出ては罪人のようにこづき廻されて此処に来、喧嘩をし、何かを求めて此処を逃げ出し、又戻って来る。寝ることを止めさせられた時から、自分等はぼろ布同然になったのだ。売物の身体の時には、それ相当の衣裳を着て、飾りたてられていたのだが、止めたその日から貧乏は迫って来、次第にみすばらしくなってしまった。身体が汚れているために外側を飾ったのだから、その反対にぼろ服になれば中身はきれいになると云うならまだしも諦められるのに——、と邦代は、岩国のキャンプでのオンリー時代、一生に一度は着てみたいと思っていた洋装をし、耳飾り、首飾りをキラキラさせていた自分をいまなつかしく思い起すのである。しかし、野上寮母が、特別に二人を呼びよせて、あんた方はま

だ若い、その若さのために少しも傷はついていないのだから自分としても一番の希望を持っている。どうぞ暫く、朝早く起きて、夜眠ることに身体を慣らして一カ月経ってから、なんでも自分に相談して欲しい、自分も実のところお先まっくらだから三人で相談しよう、と真心で云ってくれたことを裏切りたくないのである。

「ああ、うちな、なんぞギャァー云うて叫びたい、暴れたい」

と二十才のチエユは、二十一才の邦代に甘えて、両足をバタバタさせる。

「ほんなら、そこでなんぞ暴れてみい」

「阿呆らし」とチエユは笑って邦代にもたれかかった。

「なんぞ、おいしいもんうんと喰べるとか、キュッと抱きしめられるとか、なんでもええ、すばつと時間忘れることないやろか……、一日が長すぎるわ、それに静かすぎる……、なんぼでも、なんぼでも、仰山なこと思い出すし、考えるやんか……それがしんどいやんか……、あんたはえらい先生みたいな事云うけど」

邦代はしずかにチエユを抱きしめた。この娘は自分の云いたいことを全部正直に云うてくれるのである。開け放しの性格が昨日は自分のして来た悪事、万引の事を人ごとのように話した口で……。

「キスしよう」

「ええ」

慌てて照れる顔に邦代の顔が重って二人は草の上に倒れた。ジーンと耳鳴りがする。いたずらとも真剣とも判らぬ感覚に集中して、おたがい久し振りに他人の肉の片端に触れた昂りが火柱となって身

体中に一本の線を引く。二人はやがて離れた。ひどく疲れ果てた様子で邦代は寝ころび、チエユは、上手やな、流石アチラさん仕込みや……と云おうとして黙って起上った。その横へ、かすかな、つぶれるような音がして何かが落ちた。「あっ」と驚く眼の前の草の上、紅椿が、いままで生きていた美しい死面を晒している。

「あつ、いやらしい……」

邦代もチエユも、ふと気味悪く、真上の山椿の大木を見上げた。艶々と光る黒い葉の間から、真紅の花の顔がよく見るとおびただしい数でのぞいている。

「もう行こう」とチエユは立上がった。邦代は木を見上げていた。どうかするとペロリと小さな舌を出しそうな赤い椿の顔を一つ一つ見て行きながら、病氣があるとMPにキャバレーから引きずり出され、猿でも入れるような檻の車に突込まれてガチャンと鍵をかけられ検診のためキャンプに連行された時の異国人の白い顔の不気味さを思っていた。瞬間、思いもよらず、自分を囲むすべてのものが不気味に変貌する、その予感が、過去から未来へ……やはり続いてゆく……と彼女は思い、それに挑むように花々を睨めつけた。

此処は宇治に近いM駅の国道に沿ってひなびた家々のつらなるその背後の丘に新しく立てられた府立白鳥婦人寮である。「ああ赤線の」と人々は云うが、灯の消えた赤線から来た女達ばかりではなく、病弱、貧困、孤独、の生活破綻者や、少年院から移されて来たもの、または街娼から強制収容されて来た者等、事情も年令も、まちまちな女達がみどりの丘陵一千坪の敷地にポツンと建てられた木造の簡素な家屋に通勤の男性の寮長と、野上寮母、北村助手の三人に補導されて生活していた。即

ち、元娼婦は邦代、花枝、留子、亀寿、春、しづか、小雪の六人。生活破綻者は泰子、トク、少年院はチエユ、てる子。街娼は松子、よし美、の十三人だが、それはあくまで現在の人数であって、明日は誰かが飽きあきして逃げ出すか、反対に拾われ、転りこんで入寮のため連れて来られるかは予想もつかないのである。が今日の炊事場では明るい笑い声が漲っていた。滅多にない三時のおやつである、それも四十七才のトクがせっせと摘んで来ては蔭干しにしておいた蓬をもどして混ぜあわせた蓬団子が出来上がった。今日の炊事当番は留子と花枝であるが、野上寮母と北村助手が身銭を切ったあんこを泰子とトクが煮き、団子を丸める側には全員が参加してわいわいと騒いでいたのである。

「わっ、凄いい……」とチエユが入って来て人々をかき分けて団子作りの中に加ろうとするのへ、
「あっ、手、手を洗って……」と野上寮母は眼で笑ってたしなめた。

「さあ、お団子が出来たらこちらへ廻して下さいね」

「ざあ、ますの先生」と渾名のある泰子が眼鏡を光らせて云うのに団子作り達は誰も返事をしない。べに鉢の中に大きな鏡餅ほどのみどり色の団子の親はまだ温く、ちぎってゆく度に蓬の香ばしい匂がする。

「思い出すわな、小さい時にお母はんがこしらえてくれた事……」

「そうそう、春事はるごとには小豆の上等の奴たっぷりつけて山へ遊びに行ったな」と云い合っているのは関西生まれの留子と春だ。

「何してんの」

「そうかて、耳たぶぐらいの柔かさにせえ云やあったが、ほんまにこれぐらいや」

「そんな汚い耳触りな、団子に垢がつくやないか」

「なにも汚いことあれへん、手かておんなじや、顔でも手でも見えてるもんは汚いことあれへん」

「そんなら、見えへんとは汚いか」

「またそんなこと云う、あんたのは汚いやろけど……」

「これ」と寮母がたしなめても、平気で云い合っているのは、三十五、六を過ぎた前身古女郎達であつた。若い女たちは黙ってニヤニヤ笑いながら両手の中に温いものを包んで丸めている。

「これ、どんな形にでもなるな、どや、これは」

源氏名を本名にしてしまったしづかがこれも同様の小雪に囁いて、団子二個分程をちぎり、両手でくるくると揉んで棒状にしてみせる。卑猥な笑いが乾いた唇のあたりに拡がる。

「いや、ほんま、ほんならわては」と瘠せた黒い顔に笑みを走らせて小雪が団子細工の手付ではじめるのへ、

「センセ、叱って頂戴、ほんまにいやらしいことしやはる」

と十九才のてる子がうったえる。

「この人らの作つたものはこの人らに喰べさして頂戴」

とチエウが加勢した。後から来た邦代はそれらに無関心な様子で、北村助手と共に白い皿をきびきびした動作で洗っていた。大騒ぎをして出来上つた蓬団子は一人前五個宛、たっぷりとあんこを付け、その上に白い砂糖をふりかけて皿に盛られ、食堂に落付いた女達の前に置かれた。野上寮母は、今日はみんなして楽しくおやつを作つたのだから急いで喰べてしまうのは勿体ない、茶話会の積りで

一人一芸、唄を歌うとか、話をするとかして賑かにしよう、私も北村先生も、手製の蓬団子なんてめずらしいのだから、と云った。先刻から食欲がはずみすぎてつい箸を持っていた者も置いて女達は顔を見合せた。照れているもの、ただ笑う者、たまにええもん呉れると思もたら勿体つけよ、と云わん許りの不服顔等が、しかし、表情のどこかに、皆と同じ物を同じ様に喰べ、まだその上に余興をするのは人ではなく自分なのだ、と云う期待が底に埋っている。掘り出し、探し出すのが寮母の使命であつた。

野上寮母は精神薄弱児の学園からこちらへ二カ月前に就任したばかりであつた。前任の寮母は、婦人寮開設当初の人でその頃は売防法施行の直後なので絶望的に荒み切っている年増の娼婦達が全部を占めていたためか、まず補導するには人生にこのような行儀作法があつたのを知らせるのが第一歩だと、朝から夜床につくまで、炊事、洗濯、掃除から、女大学式のきびしい行儀を躰けるのに終始した。通勤であつた寮母の出迎え、帰宅の見送りはもとより、外出して帰って来れば脱いだ着物は畳ませられる、風呂に入れば背を流す、食事の時も、まず眼上の手をつけるまでは待ち、寮母が箸をとれば、一同小さくなって「いただきます」と一日食費七十円の食事を押しいただくのである。女達は怠惰であられもない妓楼から一挙に御殿女中式の窮屈さの中で訳もなく去勢され押し黙りおどおどしていたが、時折、空瓶や、煉瓦を振り上げて、すさまじい喧嘩をすることがあり、半数以上は逃亡して帰っては来なかつた。

寮の気風は寮母の性格や意志をあっけない程簡単に反映する。——お背中、流しましょうか——そんなこそばいことせんといて、せめて風呂ぐらい一人ではいらしてほしいわ——と云う野上は、夜は

早く寝て、朝早く起きる、と云う身体の慣らしようは同じではあったが、女大学式の躰や、叱責や、訓戒で、女達が厚生するとはとんでもないことだと思つていた。彼女等は想像も及ばぬ重病人だ、身体中膿血で固つた不幸のかさぶたに覆われた悪質の病氣を持っている、が、そのかさぶたの中にもまだ犯されない部分、あるいは尚キラリと光るものの何かを見付け出すのが第一歩だと思つた。野上が此処に来てからも、脱出、入寮の出入りにさして変化はなかったが、風呂敷包一つを持って今日は居なくなつた昨夜の彼女にも野上はどこか一つ自分とつながる何かを発見していた。ただ彼女は時間が待てなかつたのだ。

「私も先生の御意見と一緒にすわ」

と三十を少しすぎた北村助手は眼を輝かせて云つた。

「嬉しいこと、そんなら真実力を併せて下さいね」

と握手した野上寮母も、そのキラリと光るものを見付けた後はどうするのかは、はつきりと解らないのである。前歴十五年、最低でも五年の、得体の知れぬ女達の不幸に対して、入寮期間六カ月の短い時間に、身心を整え、厚生、授産、就職と額面通りの仕事が出来る筈がないのである。

「とにかく愛しましょう」

野上は北村助手に云いながら、五十三才の独身の自分が彼女らに対して何かしら愛らしいものが起りかけているのを知つていた。初代寮母の時から見れば、全員が行儀が悪くなり、よく騒ぎ、寮母や助手にも失礼な冗談を云うが、それは親愛の為であり、彼女等のすべてが持っている劣等感がどうかしたはずみに停電のように消えたのだと思う。孤独な獣に似て豹変する女達であるから、明日は脱出

してしまう者でも、いつかどこかで、自分らの僅かな愛情が思い出されたら、それが何らかの形で現れたら、それだけでよいのである。大勢の女達の真実の厚生、補導と云うような事が、無力な二人の女にどうして完璧に出来るのであろうか、そんな簡単な不幸とは訳が違うのだと野上は思っていた。今日の総動員のおやつ作りも、実は野上と北村の相談であり、女達が大勢の中でせめて正しく意思表示をする言葉が云えるように、淫靡な囁きの中の笑いではなく、一同が集まって明るく笑い楽しむことが自分等でも出来ると云うことを知らせるために計らったことであつた。

食堂の食卓用の机を円形に掀げると、ところどころに茶瓶を置いて茶話会が始まろうとしている。順々に全部が唄ったり、喋ったりするのである。

「ほんなら、野上先生も、北村先生もやはりまんねんな」

「えーえ、やりますとも」

わっとみんな拍手した。うまくゆく、と野上と北村とは眼を見合し、

「芸をやってない人、つまり聞手は自由に喰べてもよろしい」

「よしや、やろう」「唄いまっせ」等と、すでに明るい空気が流れ出し、野上は、簡素な食堂にはしゃぐ女達の自身は知らぬしろじろしい唇のさびしさを瞬間見たようで、慌ててそれを払い落して声を弾ませて云った。

「それなら、私の横から始めますよ、さあ、てる子」

みんなが手を叩く中でてる子は両手で顔を覆った。少年院から移されて来た行状控えは、過失致死、盗癖である。継母にいじめられ通して暮した幼女が赤坊の義弟の子守をさせられ、乳母車を押して夏

の海岸にゆき、つい遊びすぎて、車の中の弟が熱い砂の上に落ちて寝ていたのを気付かなかったが、弟はその夜日射病で死に、それ以後継母の折檻はますますきびしくなり、一銭の小遣も呉れなくなった、が小学生のてる子はノートを使い果して勉強が出来ず、ある日ふと火鉢の横に置いてあった小銭を見付けて握りしめ、ノートを五冊買って友達に見せびらかした。母は意外にも叱らなかった。それ程気にもならぬ小銭であったのであろう。以来てる子は人が気付いて居なかったら、それを貰うのは罪ではないと思ひこむようになったのである。それは一本坊いてる子の身体の中に筋金のように通ってしまい、彼女は家出をし、放浪し、小銭を盗み少年院に入れられ、定年となって婦人寮に移された。

「てるちゃん、はようたいや」

「ええ声、聞かせてもらおう」

「唄わな、そのお団子喰べさせへんで」

口々にぞめき立てる中でてる子は頑なに両手で、近頃顔面麻痺の症状が出て片側少し歪んだ顔を覆っていた。しまった、と野上は思った。ねじまがった唇で、近頃ものを云うのも少し不自由な時のあつてる子を皮切りにしたのはいけなかった、と思った時、

「いらん」

と両手の覆いをとって、てる子は叫んだ。

「喰べなんたら唄わんでもええねやろ、いらん絶対にいらん」

「てるちゃん、そんな……」